

<b>Title</b>	金谷京子氏報告「子どもの言い訳にあらわれるもの」(児童における<総合人間学>の試み研究)
<b>Author(s)</b>	田澤, 薫
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.21-No.2 : 12-14
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3149">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3149</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

## 児童における〈総合人間学〉の試み 研究 金谷京子氏報告「子どもの言い訳にあらわれるもの」

田澤 薫

2011年度6月22日に開催された今年度第2回目の「児童における〈総合人間学〉の試み」研究会では、金谷京子氏（聖学院大学児童学科）が「子どもの言い訳にあらわれるもの」と題して報告くださった。具体的な事例の報告も含まれていたことから全ての参会者から活発な意見が出され、いつもに増して賑やかな研究会となった。

以下は、報告内容の概要である。

子どもの言い訳については、従来あまりよいイメージをもたれないが、ソーシャルスキルの観点からは有意義だと考えられる。そのため、子どもの言い訳を発達心理学の視点から分析した。今回の報告は、一人の男児（2歳～6歳）の家庭における発語の記録から言い訳のデータを拾ったものをもとにしている。（なお、データは、ほとんどが、報告者が場面に参与する中で収集されたものであり、一部が対象児の保護者より報告されたものである。「親子の関わり合い」に関する発語として記録した資料から、本研究に関連するものを取り出して分析を行った。報告者が参与することで幼児の発語に影響がある緊張関係はないと考えられる。）

「言い訳」は広辞苑によると「申し訳」「弁明」「弁解」である。インターネットで調べたものによると、「自分の行為に対する、本人にとっては他人を説得できる内容であると思われる論理的名分」となる。ただ、それが自分にとっては論理的名分であっても、相手にとって同様であるかは別問題である。

言い訳についての先行研究は少ない。『ビジネスマンのための言い訳集』の類書、母親向けの『子どもの言い訳がなくなる賢い方法』の類書が何冊か刊行されている程度である。

さて、一般に、言い訳はどのようなときに起こ

るのだろうか。ミスを指摘されたとき、非難されたとき、断るとき、催促されたとき、ほかにも失敗したことに気づいたとき、見栄を張りたいとき、何か借りたいとき、忘れてしまったとき、ルールに違反したとき、基準から外れたことをしたとき等が考えられる。一方で幼児の言い訳はどのようなときに起こるのか、データを拾ってみた。以下、事例の幼児について、言い訳の記録をたどってみたい。

2歳2カ月のときに「シートベルトをしなさい」と言われた際に、それを拒否したいがために「首がかゆいからしないのよ」と言い訳できている。2歳9カ月では、思うように絵が描けない場合に、「これはだめだ」と自己弁護するような言い訳がある。2歳10カ月では、いつもと違うことを指摘されて、「ここじゃないでしょう」と言って否定しているが、これは多分大人が使っていることを先取りしたものと思われる。3歳になると、思うようにできない場面で「忘れちゃった」と言っているが、これは大人もよく使う言い訳例である。また、買い物を我慢する際には「また今度にしようね」と、自分自身に向けた言い訳をしている。「おかしな言い方だね」と大人に指摘されると、「お父さんのまねだよ」と他者のせいに



報告者の金谷京子教授

する言い訳が3歳から入ってくるようになっていく。大きな物を買って欲しくて「大き過ぎて家に置くところがないから買えない」と断られると、「片付けるから大丈夫。買えるよ」と言い訳している。3歳4カ月のとき、リニューアルされた新製品を買って欲しいときに、「新しくなったんだから買わなきゃいけないんだよ」と、自分が買って欲しいとは言わずに購買の必要を訴える言い方が見られた。排泄に誘われたときには、「おむつしてるから大丈夫」と言って断っている。3歳8カ月で暴言を注意された際には、「どこの口が言った」と口のせいにする言い方が見られたが、これも大人の真似と思われる。3歳9カ月では、新しい物が欲しいときに、自分が欲しいと言わずに「(ぬいぐるみの) カメさんが欲しいって言ってるんだ」と、ぬいぐるみのせいにする言い方をしている。4歳2カ月では、新しいミニカーが欲しいときに、「お父さんが買ってって言ってたよ」と父親を引き合いに出している。幼稚園を好きくない理由を聞かれたときには、「面倒くさいから」と言っている。字が書けるようになって、名前前の字を書くように要求された場面では、「お父さんに書いてもらえば。お父さん上手だから」という逃げ方が見られた。空腹でお菓子が食べたいときには、「ずっとお腹が空いてるんだから、やっぱり食べなきゃいけないんだよ」と言っている。やっばいはいけなく注意された際には、「そんなこと言ったら遊んであげないから」と攻撃姿勢の言い方をする。就寝時の読み聞かせの際に「絵本は3冊でおしまいね」と言われると、「今日は特別5冊にするから」と自分でルールを決めて交渉する言い方が見られる。4歳11カ月では、「どうしてするの?」と尋ねられて、「そう言われても…」と理由をはぐらかす言い方が見られる。5歳2カ月で、パンを食べ続けている姿を「ずっと食べてるんじゃない」と親に指摘されて、「だって長い旅なんだからしょうがないじゃない」という言い訳も同種である。5歳6カ月では、幼稚園



言い訳をする子どもは「悪い子」なのだろうか？事例をもとに活発な議論がなされた

ごっこで歌を歌っている場面で「ちょっとよくわかんなかったからもう一度歌ってよ」と言われると、「もう言わないからね。ちゃんと頭の中に入れておかないとわかんないよ」と説教する言い方がある。食事中に使えるのに箸を使ってないことを指摘されると、「だって使いづらいから使わないんだ」と言う。積み上げる遊び道具で遊んでいて崩れてしまった場面では、「これは自分家のものと違うから、色が違うからだめなんだ。難しい」と、遊び道具のせいにする言い訳が見られた。5歳9カ月で、車の中でお菓子を食べてそれを落とした場面で、「あーあ、落ちちゃった。お父さんが下手な運転するからだよ」と父親の運転のせいにする言い方が見られた。6歳2カ月では、「どうして野菜食べないの」と聞かれた際に「さあねー、どうしてでしょう」とはぐらかすという言い方が見られた。「肩たたいてよ」と頼まれて、「僕だって疲れてるんだよ」と言い訳してやらない姿も見られた。乳児期から持っている感触のいい布を顔にこすりつけながら、止めなければいけないと自覚しているので、自分の行動の正当性を「ここのところのこういうところがいいんだよ」と一生懸命に説明している姿も見られた。6歳7カ月では、人を説得して人に買わせるという言い訳が見られるようになる。自分がミニカーを買ってもらいたい場面でもまず親に勧め、「お父さんも好きだ

から、何々店でミニカー買わなくちゃ」という言い方をした。

以上のように、加齢とともに言い訳が自分以外のものに原因帰属をするようになってくる。途中で、他者のせいにする時期があるが、他者のせいにする時期から徐々に相手に薦めて相手を説得するような行為が出てくるようになり、理由を明確にせずにはぐらかす手法も見られるようになる。これは、理由を言うと、さらに追究されることがわかってきているものと思われる。これらが、事例のデータから気づいたことである。

それでは、人はなぜ言い訳をするのか。それから、言い訳する子どもは「悪い子」なのか。言い訳の理由は大きく2つあるだろうと思われる。

1つは自己維持としての言い訳、つまり自己防衛的な、自己崩壊を起こさないための言い訳である。人間には自己維持本能があり、自己崩壊を起こさないように自分の過去の決断や行動を正当化する理由を事後に無意識のうちに探し出す。つまり、後悔にさいなまれないようにする仕組みを、人間は心理的メカニズムとして持っており、言い訳もその手段の1つだろうといわれている。感情は対人関係を含む環境と自己のかかわりのなかで、自己資源を保護するとともに自己資源の拡張を促す適用促進システムであり、怒りや悲しみのネガティブ感情が有害・無益、喜びや嬉しさ・楽しさのポジティブ感情は有益とする見解が世間一般では浸透しているように見受けられる。実際、人はネガティブ感情を意識化すると、その低減をはかる行動を選択・実行したり、原因帰属過程を評価してその意味を解釈し、自己に及ぼす脅威の低減を試みる。ネガティブ感情への対処は意図に反して自己資源を消耗・疲弊させる場合もある。対己的にも対人的にもネガティブ感情のパワーは強力であり、それに逆らうような対処は結果として自己や他者を傷つける。人はネガティブ感情を経験すると、その経験を反芻するとともに他者に語ることが多い。他者に語ることで自分を合理

化したり、ネガティブ感情を言語化することによって、ワーキングメモリー容量の消耗や自己制御力の低下を軽減させることができる。

ワーキングメモリーは、短期記憶の1つで作業記憶のことである。ワーキングメモリーの働きによって、私たちは何かをしながら次のことも記憶をして同時にいろんなことができるが、ネガティブ感情が働くとワーキングメモリーが疲弊することがあり、それを言語化による浄化作用で防ぐことができる。ネガティブ感情を言語化させて、語りを通して自己変容を誘導する。それが、いわゆる認知療法・精神分析療法・語り療法（ナラティブ）という心理療法である。こうして考えると、言い訳には自己を維持していくための効果があると期待される。子どもについても同様で、事例でもそれ以上追究されて自分が悲しい思いになることを防ぐ言い訳が出てきている。

もう1つは、対人交渉方略としての言い訳であり、相手との交渉等の手段に使えるものである。対人交渉の方略は、発達的に見ると幼児期の最初は一方向的な抗衝動的なものだったが、互いに相手のことを認めて交渉する協調的な段階を踏んでいく。今回のデータで見ると、事例の幼児の言い訳はまだ一方的で、相手のことを認めながら交渉するところまでは発達していない。

相手に説得力のあるような言い訳がきちんと言葉で言えることは対人方略としても大切である。

大人は子どもの言い訳を否定しがちであるが、その子どもなりの理由を聞き出すという環境を大人が保障することも大切だと考えられる。

（文責：たざわ・かおる 聖学院大学児童学科教授）